

魚病診断結果

田中真二・古野 優・宮本敦史・井上美佐・栗山 功

目的

県内の養殖魚の魚病発生状況を把握するとともに、その対策指導を行い、魚病被害の軽減をはかる。

方法

平成15年4月～平成16年3月に水産研究部、同尾鷲水産研究室および同鈴鹿水産研究室に診断依頼のあった病魚について魚病診断を行った。

結果および考察

総診断件数は175件（海産魚類168件、淡水魚類7件）であり、例年（350件前後）の約半分と少なかった。これは、主に夏季の水温が低かったことによると考えられる。

魚種、魚病別の診断結果を表1～5に示した。マダイでは、イリドウイルス病の診断件数は5件のみと少なかった。エドワジエラ症は例年同様、夏季～秋季に多発した。ピバギナ症も例年同様、種苗導入後間もない5～7月と低水温期に多かった。ブリでは、レンサ球菌症ワクチンを投与していない魚群でレンサ球菌症の診断例があった。また、8～10月に0歳魚において、ヤセ、異常遊泳および体表のスレを主徴とする死亡事例が散発的にみられ、累積死亡率は10～50%に達した。病魚から特定の寄生虫や細菌は検出されなかった。病理組織学的に脳におけるグリア細胞の激しい増殖と集簇像が観察され、また、主要臓器のプール材料からビルナウイルス属のウイルスが分離されたものの、死亡との因果関係は明らかにされていない。マハタ1歳魚では、6～8月にウイルス性神経壊死症（VNN）の病魚と同様に水面での横転と鰓の膨満を主徴とする症例（死亡率1%未満）が確認された。しかし、病魚からVNN原因ウイルスは検出されず、脳に粘液胞子虫のシストがみられたことから、この粘液胞子虫がこれらの症例の原因と考えられた。

淡水魚では、持続的養殖生産確保法で特定疾病に指定されているコイヘルペスウイルス病が11月に1件確認されたため、該当魚群の焼却処分と飼育施設の消毒を指導した。

表1 マダイの診断結果

病名	年齢	月別診断件数												計	
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
イリドウイルス病	0					2			2						4
	1					1									1
レンサ球菌症	0				1										1
エドワジエラ症	0	1													1
滑走細菌症	0		1	3	1										6
ハスツラ症	0						1								1
エドワジエラ症	0						2	1	5						8
	1						4	1	1	1					7
	2									2					2
トリコナ症	0	1													1
白点病	1					1	1								2
ヘチヤ症	0						2	1							3
ピバギナ症	0		1	4	6								5	2	18
皮膚カガシ症	1	1													1
リパ性白血病	0												1		1
体表スレ・ヒラン	1				4										4
消化不良	0						2								2
不明	0	1			2	1						1			5
	1					1	2								3
計		4	2	7	15	18	4	6	5	0	1	6	4	72	

表2 ブリの診断結果

病名	年齢	月別診断件数												計	
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
レンサ球菌症	0					1	2	1	3	2					9
類結節症	0			2				2							4
カガシ症	0								2						2
	1								1						1
細菌性溶血性黄疸	1						1								1
ヘチヤ症	0						2	1							3
血管内吸虫症	0				1										1
ヤセ（原因不明）	0						3	2	1						6
不明	0		1					1							2
	1						2								2
計		0	0	3	2	8	8	3	5	2	0	0	0	31	

表3 ヒラメの診断結果

病名	年齢	月別診断件数												計	
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
ウイルス性出血性敗血症	0													1	1
滑走細菌症	0			1											1
エドワジエラ症	0						2	1	1						4
	1							1							1
スクーチカ症	0									1					1
	1	1													1
計		1	0	1	0	3	1	1	1	0	0	1	0	9	

表4 トラフグの診断結果

病名	年齢	月別診断件数												計	
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
やせ病	0				2		1				1			1	5
(腸管粘液胞子虫症)	1				1										1
トリコナ症	0										1				1
スケチカ症	0												1		1
白点病	0						1								1
	1							1							1
ペテロツリウム症	0				2					1			1		4
	1				1										1
不明	0				1										1
計		0	0	0	7	0	3	0	0	2	1	1	2		16

表5 その他の魚種の診断結果

(魚種)	病名	年齢	月別診断件数												計
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
(アナゴ)															
	シュートモス症	0												1	1
	不明	0		1											1
(スズキ)															
	脳粘液胞子虫症	1					1								1
	心臓へびヤ症	1		1											1
(マチダイ)															
	エトワジエラ症	1					1								1
(マハタ)															
	ウイルス性神経壊死症	0						2	1	1					4
	脳粘液胞子虫症	1			1	2	1								4
(クエ)															
	ウイルス性神経壊死症	1								1					1
(ブリヒラ)*															
	不明	0		1											1
(マアジ)															
	ヒアリオ病	1					1								1
	レンサ球菌症	1					1								1
	不明	0			1										1
(シマアジ)															
	レンサ球菌症	1				1									1
	シュートモス症	1		1											1
	ミコバクテリア症	1							1						1
	皮膚カサ症	1											1		1
	不明	0		1			1								2
(サバ)															
	レンサ球菌症	0				1									1
(クロマグロ)															
	衝突死	0			2										2
(カワハギ)															
	レンサ球菌症	1					1			1	1				3
	未同定細菌病	1											3	1	4
	シュートカサ症	0										1			1
	噛み合い	1			1										1
	不明	1												3	3
(カサゴ)															
	真菌症	0											1		1
(アユ)															
	滑走細菌症	0											1		1
	不明	0				1							1	1	3
(コイ)															
	コイヘルペスウイルス病	1								1					1
	不明	1										2			2
計			3	4	4	8	3	2	2	4	3	2	6	6	47

*ブリ×ヒラマサの交雑魚

感受性ディスク法による主要病原菌の薬剤感受性試験の結果を表6に示した。ブリのレンサ球菌症原因菌株の多くがエリスロマイシン、リンコマイシンおよびアンピシリンに耐性を示した。

表6 主要病原菌の薬剤感受性

薬剤名	菌株数				計
	-	+	++	+++	
塩酸キジテトラサイクリン	0	3	0	4	7
フロルフェニコール	0	0	1	4	5
チアンフェニコール	0	0	0	7	7
エリスロマイシン	6	0	0	3	9
リンコマイシン	4	1	0	0	5
アンピシリン	7	0	0	1	8

エドワジエラ症 原因菌 (マダイ)

薬剤名	菌株数				計
	-	+	++	+++	
塩酸キジテトラサイクリン	0	0	1	14	15
フロルフェニコール	0	0	1	12	13
チアンフェニコール	0	1	0	8	9
アンピシリン	7	0	1	3	11
オキシリン酸	0	0	5	9	14

エドワジエラ症 原因菌 (ヒラメ)

薬剤名	菌株数				計
	-	+	++	+++	
塩酸キジテトラサイクリン	1	0	0	4	5
チアンフェニコール	0	0	3	2	5
アンピシリン	4	0	0	0	4
ニコルズリン酸ナトリウム	0	0	0	2	2
オキシリン酸	0	0	4	1	5